



# ペットの災害対策を考える 自分とペットの命を守るために

みなさんは万が一、災害が起きてしまった際の備えをされていますか？  
ペットを飼っている場合、家族の一員であるペットをどのように守るべきでしょうか。  
今回は、ペットを守るための備えについてお話しします。  
まずは、自分の命を守り、ペットも助かるために「一緒に避難す



る」という選択肢を持つことが大切です。  
そのためにはまず、お住まいの市町のホームページなどを確認し、同行避難・同伴避難(※)が可能な避難先を調べておきましょう。  
避難の際は、ペットやその荷物も増えるため、早い段階での行動を心がけることが大切です。  
また、避難所では、動物を飼っていない方も一緒に過ごす可能性もあります。そのための日頃の準備として、ワクチン接種やノミ・ダニなどの寄生虫対策、マイクロチップの装着などの基本的な健康管理の他に、「待て(制止)」「おいで(呼び戻し)」などの基本的なしつけや、キャリーケースに慣れさせておくことも重要です。  
その他、ブラッシングで毛の飛散を抑えておくなど、周りの方への配慮も必要となります。

下のチェックリストを活用し、早めに準備をしてみてください。  
広島県では「広島県災害時動物救護基本指針」を策定しており、震災などの大規模災害

### スムーズな避難のためのチェックリスト

- 同行避難・同伴避難が可能な避難先を調べておく
- 鑑札やマイクロチップの装着
- ワクチン接種、ノミ・ダニの駆除
- 避難グッズを用意しておく
  - ・最低一週間分の水とフードの用意
  - ※療養食、アレルギーがあるなど、特別なフードが必要な場合は多めに用意
  - ・首輪、リード
  - ・薬
  - ・キャリーケース
  - ・トイレシート、汚物の掃除道具
  - ・迷子になった時のための写真

発生時には、動物愛護管理、動物による人への危害防止、生活環境保全などの観点から、県および県獣医師会が構成する動物救護本部を設置します。県のホームページで災害時の取り組みを紹介しておりますので、上の二次元コードから確認してみてください。  
大事な家族であるペットの命を守ることが出来るのは飼い主です。ともに安全に避難し、周りの人へ迷惑をかけず、安心して過ごすために、日頃からの心構えと備えを考えてみましょう。  
※同行避難：ペットと避難場所まで避難すること。  
同伴避難：ペットと一緒に避難し、かつ避難所へ一緒に過ごすこと。  
(広島県健康福祉局 食品生活衛生課)

## ひろしま 気候変動適応センター

明けましておめでとうございます。一年の中でも一番寒い時期にさしかかりつつありますが、気象庁の「気候変動監視レポート 2022」によると、日最低気温が0℃未満の冬日は全国的に減少しているそうです。このレポートの中

# 冬日が全国的に減少 降雪に与える影響にも注視

では積雪についても解析しており、山陰地方が含まれる西日本日本海側は、年間の最深積雪と、一日の降雪量が20cm以上の日数が減少傾向にあります。また、気象研究所などの共同研究では、北アルプスの降雪が現在よりも極端化し、降雪量が多い年はより多く、少ない年はより少なくなるという予測が示されています。

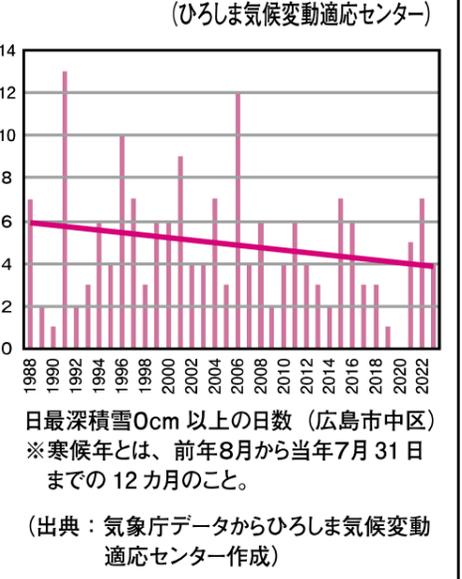
広島県内については、「広島」の観測地点が広島市中区になった1988年からの10年間と、直近10年間の日最低気温の年平均を比較すると、0.8℃上昇しています。積雪が多い県北部の観測地点「高野」と「大朝」で

	広島	高野	大朝
1988～1997平均	12.3	5.6	6.6
2013～2022平均	13.1	6.2	6.9
差	+0.8	+0.6	+0.3

日最低気温の平均(℃)

同様の比較をすると、それぞれ、0.6、0.3℃上昇しています(下表)。図は「広島」で観測した、わずかでも積雪があった(日最深積雪0cm以上)日数の経年変化を表しています。ばらつきが大きいです。1988年に降わずに減少傾向にみえます。最深積雪についても同様です。一方で、県北の2地点は、最深積雪に一定の傾向はみられていません。

現在のところ、気候変動が広島県の降雪に与える影響は明らかになっていませんが、積雪量の変化は、冬の産業や、農業用水など春季の水資源に影響を与える可能性が大きいので、今後も注視していく必要があります。



## 日常の「たいがい」「こそちチャンス

被災地の今  
災害時に被災者、地域が直面する課題の多くは、日常課題の延長線上にあるとよく言われます。  
災害前からの持病は、慣れない避難生活や、復旧活動を通じ悪

化します。普段近所づきあいが少なかった隣人は、より孤独に陥りやすくなります。  
空き家や不確実な土地の境界線が、復旧の大きな障害になることもしばしばです。  
また、それらが複雑に絡み合い、何をしたらいいのか、茫然自失する被災者にも幾度となく出会ってきました。

今夏、私とある被災地で出会ったAさん  
も、そんな状況に直面し、将来に希望が持てずいました。  
結論からお伝えすると、ボランティア、福祉専門職をはじめ、さまざまな人がAさんの生活再建に向け尽力しましたが、ようやく道筋が見え始めた頃、Aさんは体調を崩し休んでしまいました。  
被災地では住民、地域、行政、民間団体、ボランティアなど、多

様な人々が復旧・復興に向け尽力していきましょう。  
しかしながら、未だ今回のように、納得しきれない結末を迎えることがあります。  
では、このようなケースを防ぐために私たち何ができるのでしょうか。  
私は、それはやはり日常にあると思います。そして、その日常は

少しだけ「たいがい」かもしれないことを、どこまでやれるかということだと感じます。「たいがい」けど健康のために少し外を歩こう。たまには遠方にいる子ども、親に電話をしよう。お隣さんに声をかけておこう。町内会に顔をだしおこう。「ちよつとたいがいいなあ」そう感じた時こそチャンスかもしれません。その時行動した積み重ねが、いざという時の大きな支えになるはずです。  
(特定非営利活動法人 ひろしまNPOセンター 増田 勇希)



日頃の顔の見える関係性づくり(サロンの様子)